

Historical perspective of pesticide poisoning in Japan and measures taken
by the Japanese Association of Rural Medicine. (J Rural Med 5(1):129-133)
の和文要約

日本における農薬中毒の歴史と農村医学会の対応

永美大志 (佐久総合病院・健康管理部)

農薬は第二次大戦後急速に使用量が増え、労働負担の軽減、食料の増産に貢献してきた。一方で、農薬中毒、環境汚染を引き起こし、農村医学の主たる課題となって久しい。若月俊一が設立した日本農村医学会は、長年この問題に取り組んできた。中でも、有機水銀の毒性を動物実験で明らかにし、日本における使用を禁止させたこと、ベトナム戦争における枯葉剤による出生時欠損を明らかにし、米国が作戦を中止にせざるを得なくなったことなど、農薬中毒問題について社会的責任を果たしてきた。近年は農薬の低毒性化に伴い、散布中に死亡事故が起きることは極めて稀になり、本学会の活動もやや低調となっている。しかし、農薬は本質的に生物毒性のある化合物を、田畑、住居などで開放的に使用するものであるから、その人体影響、環境汚染には絶えず留意する必要がある。今後は、慢性的な人体影響を疫学的に究明すること、東南アジア地域における農薬中毒の防止に寄与することなどにも取り組んでゆく必要があるだろう。